
無関心の遠距離恋愛

空無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無関心的遠距離恋愛

【Nコード】

N7284D

【作者名】

空無

【あらすじ】

夕焼けの中、歩いた。茜色に誘われて、思うのはアイツのこと。

（前書き）

登場人物に疑問を持って、好きな設定で安心してお読みください。

外に出ると、まだ日は高かった。

朝の内は曇っていた空が、綺麗な茜色に染まっている。それは、恐ろしささえ感じるほどの、壮麗なグラデーションだった。

燃えるような空の色に、夕焼けとはよくいったものだと感じる。思わず立ち止まってしまった僕を、後から外に出てきたひと達が訝しそうに見ていた。進路を邪魔していたからかもしれない。

それでもそのときの僕には、そんなことを気にしている心の余裕などなかった。

その朱が、あの子の色を思い出させて。

「逢いたいな……」

ぽつりと零れた言葉。意識して呟いたわけではない。だから多分、それは僕の本音なのだ。

でも、僕からどうこうするつもりはなかった。

邪魔に、なりたくない。迷惑だと思われたくない。そんな、臆病な思いを拭うことができなくて。

もう一ヶ月も、声さえ聞いていないのに。

初めの頃は、こんなに離れるときがくるなんて思ってもみなかった。いや、正確には、離れていてもこんなにも平気で、けれどこんなにも辛いなんて、思わなかったんだ。

「どうしてるかな、アイツ」

無条件にずっと傍にいられるものだと思っていたのはきつと、僕だけだ。ちゃんと考えたら、分かることなんだ。

歳をとれば、生活が変わることくらい。

「……電話かメールくらいしてこいつつの」

見事な放置プレイだ。僕はかりがやきもきしている。

『おはよう』とか、『おやすみ』とか、それだけでもいいのに。それすら、最近は送られてこない。最初の内は結構頻繁だったんだけれど。

忙しくなるんだとは告げられていたけれど、それがこんなにかかるとなんて聞いてない。だから文句もあるけれど、ホントにまだ忙しいなら、そんなこと言っちゃ駄目だっと思う。

僕は、負担にだけはなりたくないんだ。

「……淋しいなあ」

四六時中傍にいたあの温もりを、僕はまだ忘れていない。その記憶があるから、今、ひとりでいられるんだから。その拠り処がなければ、僕はきつと耐えられない。

ちゃんとそれは、知っていてくれていると思っていたのに。

「淋しいよ……」

じわり、と目の奥が熱い。涙腺が緩んだんだ。けれど此処で泣くわけにはいかない。往來でなんて、しかもこの場所なんて、泣いたら明日から近づくことさえなくなる。

だから足早に、その場を離れた。駅への道を離れて、商店街の裏小道へ。

今の僕には、其処しか人通りのない場所なんて分からなかった。飲み屋の看板が小さく掲げられている小道。こんな時間に、この辺りを歩いているひとはいない。

僕はゆっくりと、深呼吸した。

「何で、連絡くれないのかな……」

一ヶ月は長い。あつという間に過ぎてしまった気もするけれど、やっぱり長く感じる。出逢ってから、いや、傍にいたようになってから、こんなに離れたことはない。

これが仕方のないことだと今は分かっているつもりだけれど、でもやっぱり逢いたいと思う。

その度に、自分が未熟に思えて凹むのだけれど。

「どうせ僕は学生だよ……時間ありすぎだよ……」

肩書きの違いが、こんなにも遠く感じる。

時期によつては命を削るような忙しさの仕事だから、だからこちらから連絡なんてできない。していいかどうかさえ、僕には判断ができない。

だから待っているのに。

この一月、ケータイは何の反応も示さない。勿論、パソコンも。

「アイツのために、週末全部空けてるのになあ……」

何かアクションをすれば現状はとりあえず変わることは分かっているのに、やっぱりマイナス方向に考えが走ってしまつて堂々巡り。こつやつて、独りで愚痴るしかできない。前に悪友の前で愚痴ったら、とんでもないことを言われたから、言いたくない。

「ならその週末、どうして押しかけて来ない？」

「っ」

誰よりも身体に染み込んでいるその声に、僕は思わず身体を振る

わせた。というか、固まらせた。

今日は平日だ。少なくとも、休日だとは聞いていない。

「まったく、独りで愚痴るくらいならメールくらい寄越せばいいだろう。オマエはホントに、自分からは動かないな」

「……なん、で」

まだ日が当たっている数少ないその場所に、疲れたような顔で立っている。ラフな格好じゃない、スーツをきちんと着ている。

……休日じゃ、ない。

ならどうして此処にいるのか。僕の頭の中は今、疑問符で一杯だった。

「仕事でこっちに出張だったんだ。思ったより早く打ち合わせが終わったから、頼んで時間貰った」

そんなことを、仕事を始めたばかりの新人がしていいのだろうか。そういったことを知らない僕にだって、心配になる。今は閑散期ではないのだ。メールも来ないほど、繁忙を極めている筈なのに。今だって、目の下に隈が見える。

「文明の利器様々だな。なんとかぎりぎりで見つけた。……おいで」

そう言って、手を差し伸べる。けれど僕は、其処から動けなかった。思考が、現実を追いついていなかった。その反面、何処か冷静に現状を把握している自分もいる。

「……メールくらい寄越せ」

「一段落はしたからな、ちゃんと送るようにする」

「嫌だっただからな」

「喧嘩はしていない筈だが？」

「それでも、嫌だっただ」

「そうか、悪かった」

連絡が途切れたことが、いや、連絡をしてくれないことが、嫌だった。手を振り払われたら、僕は自分の足で立つことさえできないんだから。手を差し伸べていてくれないと、僕は何もできない。

それを知っている筈なのに、それでも連絡ができないほど忙しかった。でも、今、此処にいる。

それが、嬉しかった。

それだけで、他はどうでもよくなった。

「一ヶ月経ったのに、オマエからの音沙汰もなかった。それでも焦ったんだ」

「……なんで？」

「浮気でもされていたら困るなと」

悪友と同じことを言う。僕が気に入るだけあって、ふたり共思考回路が似ていたりするんだろうか。それとも、世間的にそう考えるのが普通なんだろうか。

僕には分からなかった。

「なんで僕が、オマエ以外を選ぶの？ オマエに振られたならともかくさ」

「振る予定はないが」

「僕にだって浮気する予定はないぞ」

そう言い切ったら、何故か苦笑された。けれどなんとなく、僕とは違うところで悩んでいたのだとは分かった。悩んでいなかったら、

『浮気』なんて言葉は出てこない筈だから。
でもよく分からない。どうして僕が浮気するんだろ。そもそも
浮気って、何だろ。

「つと、もう時間だ」

「そか」

「帰ったらメールはするよ」

「ん」

「じゃあ、待ってるよ？」

「分かった」

電車の時間でもあるのかもしれない。

ばたばたと駆けていく後姿を眺めながら、僕は気分がよかった。

今日は気持ちよく眠れそう。最近、夜は眠れなくて、だから昼間
眠くて仕方がなかったから。

姿が見えなくなってから、僕もようやく商店街の表通りへ出る。

ひとがそれなりにいて、閑散としていてもちゃんと賑わって見えた。
それを後目に、駅へと歩く。

鼻歌だつて歌えそうだった。

「お疲れ様」

直接は言い忘れていた言葉が、ここで言っても無駄なのに口をつ
いて出た。周りに聞こえたかなと思っただけ、小さな声だったから
大丈夫だったみたいだ。聞こえても別にいいけど。

今の僕は、機嫌がいい。

次の日悪友に話したら、何も解決してないんじゃないか、と言

われた。

……何か問題、あつたっけ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7284d/>

無関心的遠距離恋愛

2011年1月27日13時07分発行